

遠藤周作著『沈黙』を読む

中 村 淳 子

目 次

はじめに

第一章 キリスト教の土着化

第一節 日本人の宗教観

第二節 日本的キリスト教の可能性

第二章 弱者の論理

第一節 弱者と強者

第二節 キチジローとロドリゴ

第三章 神の存在

おわりに

はじめに

私は、高校三年生の現代国語の授業で初めて、遠藤周作氏の『沈黙』の中のでに棄教してしまったフェレイラが、かつての弟子であるロドリゴに棄教をせまり、ついには棄教してしまう一部分を読んだ。その時、私は自分に向かって迫ってくるような迫力、緊張感、そして飾り気のない人間の心情を率直にあらわしている点に非常に

共感し、感動のままに、すぐに『沈黙』を買って一読したことを覚えていた。その中で、多くの農民達や司祭達が苦しい拷問に会い殉教していった。その状況をフェレイラは、次のように言っている。

「では、お前は祈るがいい。あの信徒たちは今、お前などの知らぬ耐えがたい苦痛を味わっているのだ。昨日から。さっきも。今、この時も。なぜ彼等があそこまで苦しまねばならぬのか。それなのにお前は何もしてやれぬ。神も何もせぬではないか。」(二一四)

これはまさに私が抱いていた疑問であった。だから、「沈黙」という題は、まさに主題の象徴であり最高の題であると思った。しかし、この『沈黙』を深く読んでいくうちに遠藤氏が本当に言いたかった事は、「神の沈黙」ということではなく「神は語っていた」という事であることがわかってきた。私は、これからこの主題を中心に論文をすすめていこうと思う。

なお、引用の本文は、すべて新潮文庫所収の遠藤周作著『沈黙』によるものとし、引用の本文の後の()内には引用した頁のページ数を記した。

第一章 キリスト教の土着化

第一節 日本人の宗教観

日本では、西暦紀元五三八年に中国より仏教が伝来して以来、鎌倉時代にも室町時代にも仏教は多くの庶民に信仰され、その中から、日蓮、法然、親鸞、などの多くの天才が生まれ、次第に世界一の仏教国となった。

それは、日本人が、仏教の中に、母親のイメージをもっているからである。そもそも日本人は、超越したものとか神を考える場合に父親のイメージよりも母親のイメージをもつてくる。母親のイメージとは、父親の律法と義をもつて統制する「こわい」イメージと異なり、無条件でなにかも包容する（善いとか悪いとかいわない）愛のイメージである。このことを、作中の井上筑後守はこう語っている。「かつて余はそこもとと同じ切支丹バードレに訊ねたことがある。仏の慈悲と切支丹デウスの慈悲はいかに違うかと。どうにもならぬ己れの弱さに、衆生がすがる仏の慈悲、これを救いと日本では教えておる。だがそのバードレは、はつきりと申した。切支丹の申す救いは、それとは違うな。」(二三六)

さらに、日本人は汎神論的性格をもっている。この汎神論的性格とは——全は個の延長もしくは全体であり、この両者の間には何等の差もなく、つまり神的なものが自然的なものを土台としてその拡大、或は延長であり、自然的なものは神的なものの同一的存在であることを意味する。だから人間は自然に対し大きな距離を感じることもなく自然に、神々に、宇宙に、とけ込む事ができるのである。

遠藤氏は、このような汎神論的性格を、『誕生日の夜の回想』というエッセイの中で次のように書いている。

「日本の感性は汎神的風土伝統を母胎としてうみだされたものであるが故に、汎神性の二つの性格を持つている。第一にそれは一切の能動的姿勢を失っている。第二に吸いこまれることがただ一つのあがれである事——この二つである。」

又、この点について遠藤氏は作中のかつての宣教師で老司祭のフェレイラに次のように語らせている。

「日本人は人間とは全く隔絶した神を考える能力をもっていない。日本人は人間を超えた存在を考える力を持ってない。」(一九三)
「日本人は人間を美化したり拡張したものを神とよぶ。人間と同じ存在をもつものを神とよぶ。だがそれは教会の神ではない。」

第二節 日本のキリスト教の可能性

「二十年間、私は布教してきた。」フェレイラは感情のない声で同じ言葉を繰り返しかえしつづけた。「知ったことはただこの国にはお前や私たちの宗教は所詮、根をおろさぬということだけだ。」「根をおろさぬのはありませんか」司祭は首をふって大声で叫んだ。「根が切りとられたのです。」だがフェレイラは司祭の大声にさえ顔をあげず眼を伏せたきり、意志も感情もない人形のように、ただ聞くのみであった。「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと怖しい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我

々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」。(一八九)

これは、思いがけなく師フェレイラに遭わされ、今は日本人となつた師の口から「キリスト教は土着しない」ときかされ、それに対して抵抗するロドリゴの黙している場面について書かれた部分である。たしかに、二十年前にフェレイラもロドリゴと同じように、いやそれ以上の信仰に燃えてこの国の土を踏んだ。そのフェレイラが様々な体験をとうして確信した最終的な日本観とは、どんなものであつたか。作中の言葉から探つて見よう。

「切支丹が亡びたのはな、お前が考えるような禁制のせいでも、迫害のせいでもない。この国にはな、どうしても基督教を受けつけぬ何かがあつたのだ。」

(一九五)

このようにフェレイラが語っているように、日本の特異な性質に對する「キリスト教土着」の期待が裏切られることの失望と諦めである。そこで、フェレイラの言葉の中にある基督教を受けつけぬ何かの「何か」というのは、一節で述べた日本人の神(超越した者)に對する母親的イメージであり、汎神論的性格なのである。本来キリスト教とは、父親のイメージであり、ただすぎるだけの仏の慈悲とは異なる、切支丹の教えを信徒が力の限り守る心の強さを伴っているものであり、また、一神論的性格(人間は天使からも神からも厳然と区分されているという考え)をもっている宗教なのである。

ところで、今まで「キリスト教の土着」という言葉を数多く使ってきた。ここで「土着」ということについて少しふれておきたい。ここでいう「土着」というのは、新約聖書の中の聖言にある「一粒の麦」のたとえのように、その種がまかれた土壌の中に深く身をお

ろし、死して自らを失うように見えながらも、その土壌の本質をゆさぶり、新しい価値をもって対決することを通して、その土壌のふところから新しい生命が芽生え、その生命を原動力とした新しい文化、新しい生活が育つてゆくことを意味するのである。

こういう点からも考えてみて、私はやはり「キリスト教の土着」はありえないように思う。なぜなら、キリスト教がただ庶民に信仰されないというだけでなく、日本人が信仰していると信じているキリスト教も、救主イエス・キリストの限らない愛を根源とする本来のキリスト教とは大きく変化した、仏教的な雰囲気をもった屈折したものとなっているからである。その屈折の原因は、日本人に、真の意味での、神の御前における「罪」の悔い改めが、「赦」の信仰として自らの内に定着し難いものがあるからであろう。

第二章 弱者の論理

第一節 弱者と強者

遠藤氏の文学の中には、「強者」と「弱者」を対立させた作品が多くある。例えば、『わたしが棄てた・女』の三浦マリ子(強者)と森田ミツ(弱者)、『白い人』のジャック(強者)とハンツ(弱者)であり、『沈黙』の中の苦しい拷問に耐え殉教したモキチやイチゾウ、ガルベ(強者)と、転んでしまうキチジロー(弱者)である。

これらの作品の中で、遠藤氏が重要な役割を与えているのは、強者ではなく弱者である。遠藤氏は、自分の最も言いたい事、自分の思想をこの「弱者」を通して表現しているのである。だから、作中の

中で強者に比べて、弱者は作者の愛情を一身に受け、生き生きと描かれている。つまり、「弱者」の語る言葉はそのまま遠藤氏の語る言葉としてとらえてよいと思う。そして、「強者」ではなく「弱者」の口をかりて語らずにはおられなかった、遠藤氏のキリスト教徒としての苦しみを讀みとらなくてはならないと思う。

それでは、遠藤氏は「強者」をどのようにとらえているのか。遠藤氏は、「強者」（自分の信念と信仰をどんな迫害や責苦にも屈せず）に守り通して死んでいった殉教者）を「エゴイスト」であるとしてとらえている。その根拠となる箇所は、背教者フェレイラと司祭ロドリゴの次の問答である。背教をせまられたロドリゴは、穴吊りの拷問にあっている信徒達の呻き声を聞く。

「あの人たちは、地上の苦しみの代りに永遠の悦びをえるでしょう」「誤魔化してはならぬ」。フェレイラは静かに答えた。「お前は自分の弱さをそんな美しい言葉で誤魔化してはいけない。」「私の弱さ」；司祭は首をふったが自信がなかった。「そうじゃない。私はあの人たちの救いを信じていたからだ。」「お前は彼等よりも自分が大事なのだろう。お前が転ぶと言えばあの人たちは穴から引き揚げられる。苦しみから救われる。それなのにお前は転ぼうとはせぬ。お前は彼等のために教会を裏切ることが怖ろしいからだ。このわしのように教会の汚点となるのが怖ろしいからだ。」（二二六）

この箇所で、ロドリゴがエゴイストであることが暴露されているというのも、ロドリゴが転ぶと言えれば信徒たちは救われるのに、ロドリゴは転ぼうとはしない。それは強い信仰心のためだったかもしれない。しかし、それだけではなく、自分を「英雄」にしたかった

のである。殉教した後、「あの司祭は素晴らしかった」と信徒から称賛され義望されたかったのである。ロドリゴだけに限らず、あらゆる拷問に耐え殉教していった司祭、信徒達を最後まで支えたものは、強い信仰心と強じんな精神力の陰にかくれているヒロイズム的な意識なのである。

このようにして、遠藤氏は「強者」を否定するのである。そして作中の最終場面で次のように述べる。

「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかったと誰が断言できよう。」（二四一）

作者は、そのようにロドリゴに語らせ「弱者の肯定」を主張している。つまり、遠藤氏は「強者」であるがゆえに素晴らしいとされ、「弱者」であるがゆえに軽蔑され、神の愛を受けることができなという観念を捨て、強者であろうと弱者であろうと、苦しんだ分だけ神から愛（あわれみ・いつくしみ）を受けることができる。という考えを根底にして、転んだために他の信徒達からも軽蔑され、自分で自分を許すこともできず、追いつめを感じながら一生陽のあたらない場所で生きていかなければならない「弱者」の苦しみ、が、「強者」の苦しみに比べて少なかったと断言することはできないという意味で、弱者を肯定しているのである。しかし、作者は、このような主張をすることにより、「転びを肯定するのみならず讚美する危険」、あるいは「正統的な信仰の破壊」などの多くの批判をあげることもなつたわけである。

第二節 キチジローとロドリゴ

キチジローとは、キリシタンであるが臆病者であり、堂々と拷問を受けたたり、殉教したりする勇氣がなく、役人に一寸脅かされればすぐに踏絵を踏んでしまうような弱虫で卑怯者である。しかし、遠藤氏はこのキチジローに本当に重要な役割を与え、弱者の精一杯の抗弁をさせている。

「じゃが、俺にやあ俺の言い分があつと。踏絵ば踏んだ者には、踏んだ者の言い分があつと。踏絵をば俺が悦んで踏んだとも思つとつとか。踏んだこの足は痛か。痛かよオ。俺を弱か者に生まれさせとおきながら、強か者の真似ばせるとデウスさまは仰せ出される。それは無理無法と言うもんじゃい。」 (一四六)

この言葉をただの弱虫の言い訳と聞き捨てすることはできない。人間というのは、もって生まれた性分として強者と弱者がいる。そして、その性分とは自分でどうすることもできない天からの授かりものなのである。誰しも強く生き「英雄」と呼ばれたい。それなのにどうしても強く生きることができない。それは、決して強者には理解することのできない弱者の悲痛なそして切実な叫びなのである。

そして、遠藤氏はもう一つの重要な役割として、ユダが最後の晩餐の後、イエス・キリストを裏切つたように、キチジローもまたロドリゴを迫害者たちに売つてしまふというように、キチジローと「史上最大の背教者ユダ」とを同質のものとして置いている。このことから、キチジローの運命を考え、知ることが、ロドリゴが今までどんなに考えても理解することのできなかつたイエスが裏切者のイスカ

リオテのユダに向つて言つた「去れ、行きて汝のなすことをなせ」の言葉の深い意味を理解する糸口となるのである。このように、キチジローは作品の中に終始登場し、「弱者の復権」を主張し、常に「神の沈黙」ということを問ひながら、ロドリゴに大きな影響を与え、まさにこの作品の中心人物となつて置いている。

次に、もう一人の中心人物であるロドリゴもまた弱者である。ロドリゴは司祭であるため聖職者としての誇りもあり、神に対する信仰も厚い。一般的には強者である。しかし、ロドリゴはキチジローの語つた次のような言葉に心を深く刺されたにちがいない。

「なんのために、こげん苦しみばデウスさまはおらになさつとやろか。」 (六八)

「バードレ、おらたちあ、なあにも悪かことばしとらんとに。」 (六八)

このような言葉をロドリゴは聞き棄てることができなかつたばかりでなく、キチジローの次の言葉に強く惹かれる。

「モキチは強か。俺らが植える強か苗のごと強か。だが、弱か苗はどげん肥しばやつても育ちも悪う実も結ばん。俺のごと生まれつき根性の弱か者は、バードレ、この苗のごたるとです。」 (九九)

こういう言葉にロドリゴは共感し、もし自分も司祭でなかつたら肉体の恐怖に負けて、キチジローと同じように踏絵を踏んだであらうと考える。このように、キチジローの存在がロドリゴの中でだんだんと大きくなり、キチジローが主張する「弱者の論理」に屈服し、ついに踏絵に足を掛けてしまふのである。(もちろん、転んだ理由はそれだけではない。フェレイラに自分のエゴイズムを暴露さ

れたり、どんなに祈っても神が何ひとつ助けてはくれなかったことなど様々である。

このように、キチジローもロドリゴも転び者という意味では、「弱者」である。しかし、この世の中にどれほど多くの強者が存在するだろう。人間はみな、多かれ少なかれ根底には弱い部分をもちそれを隠して生きている。その弱い部分をあからさまに、生き生きと描き出されているのがキチジローでありロドリゴなのである。そして、このような弱者達にあたたかい眼差しをおくっている遠藤氏の人間としてのあたたかさを感じることが出来る。

第三章 神の存在

遠藤氏は、この『沈黙』の中で、「神は存在するか」ということについて、たえずロドリゴをとうして問いかけている。

そのロドリゴは、神の存在を信じていた。だから「いつまでも（神様は）黙っていない筈だ。」という神に対する信頼があった。しかし、信徒達が拷問にあっても、ガルベが殉教をしようとしても、神は沈黙を破ろうとはしない。救おうともしない。だんだんとロドリゴの心の中で不信感が強くなってくる。しかし、その不信感是否定しなくてはならない。なぜなら、神の存在を信じ生きてきたこれまでの自分の人生が、まったく無意味なものになってしまいうからである。

（万一神がいなかったならば……）

これはロドリゴにとり怖ろしい想像でした。彼（「神」）がいなか

ったならば、なんとという滑稽なことだ。もし、そうなら、杭にくぐられ、波に洗われたモキチヤイチゾウの人生はなんと滑稽な劇だったか。多くの海をわたり、三ヶ年の歳月を要してこの国にたどりついた宣教師たちは、なんとという滑稽な幻影を見つけたのか。そして、今、この人影のない山中を放浪している自分は、なんとという滑稽な行為を行っているか。（八六）

このような自分の体験が、ロドリゴには「神の存在」を信じる唯一の支えとなっているのである。しかし、その信頼もフェレイラの事実体験に基づいた言葉にゆらいでゆくのである。

「わしが転んだのはな、いいか。聞きなさい。そのあとでここに入られれ耳にしたあの声に神が何ひとつ、なさらなかったからだ。わしは必死で神に祈ったが、神は何もしなかったからだ。」（二一四）

「では、お前は祈るがいい。あの信徒たちは今、お前などが知らぬ耐えがたい苦痛を味わっているのだ。昨日から。さっきも。今、この時も。なぜ彼等があそこまで苦しめねばならぬのか。それなのにお前は何もしてやれぬ。神も何もせぬではないか。」（二二四）

ロドリゴのために拷問にあっている信徒達を前にして、「神は存在するか」と、作者はフェレイラに語らせ、ロドリゴに詰問するのである。この時の「神」というのは、「神」そのものではなく、ロドリゴの信じる「神」である。そして、そのロドリゴの神は、その時、このように言われる。

「踏むがいい。お前の足の痛さはこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。」（二四一）

そして、フェレイラの神もまた「人々のために転んだらう」と、神はこれまで決して語らなかつた言葉をはつきりと嘖いたのである。このような、神の嘖きをきいてロドリゴはついに踏絵を踏んでしまう。そして、このように神が沈黙を破ることに関して、「作者遠藤氏は、信仰の上から語ってはならないか、或いは語りすぎてはならないものを語るのに雄弁すぎた」とか、またそれが「最も残念な点」である、などと多くの批判をあびた。しかし、ロドリゴが転んだのは沈黙をやぶつた神の嘖きの中に「神の愛」を感じたからである。元来、遠藤氏は「神は永遠に沈黙したもう」という固い信念をもっていた。その遠藤氏がなぜこの作品の中で、沈黙を破る神を描いたかという点、そこまですなければ遠藤氏が一番表現したかつた「神の愛」を語ることができなかつたからなのである。

次に考えたいのはキリストの顔の変化である。長い間、教会またロドリゴが考えていたキリストの顔というのは、威厳があり立派で美しい顔である。しかし、その顔はいついかなる時でも沈黙をつづけ奇蹟などは一度もおこらなかつた。しかし、ロドリゴが日本ではじめて見た踏絵の上に描かれたキリストの顔は、疲れきつて、くたびれ、消耗したみにくい顔だつた。だから、その顔は「そういう私だから踏んでもかまわぬ」と、はじめて沈黙を破るのである。その顔には、日本の母親の顔、つまり何もかも許してくれる顔があつた。

つまり、遠藤氏の信じるキリストというのは、奇蹟などを行えない無能力者であるが、そのかわりいつでもみんなといっしょに苦しんでいる。そういうキリストである。だから、神は存在し沈黙して

いたのではない、と遠藤氏は言いたかつたのである。そして、ロドリゴの人生―たとえば、転ぼうとした時、神はきつと「私は、お前といっしょに苦しんでいるではないか。教会や聖職者たちは、そんなお前の気持ちはわからないかもしれない。しかし、私だけはお前とずつといっしょにいるではないか」と語っているように―をとらうして、神は語っていた。ロドリゴの人生そのもののドラマをとらうして神は語っていた。このことを遠藤氏は、『沈黙』の中で語りたかつたのである。次の言葉が何よりもそれを証しているであろう。

「たとえあの人は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。」

おわりに

私は、キリスト教徒でもないし、宗教にもあまり興味もないし、かわりもないと思つている。しかし、苦しい時辛い時は、別に神、仏が存在すると信じているわけではないのに、思わず「神様仏様」と心の中で念じてしまう。いわゆる、「苦しむ時の神だのみ」であるが、これが遠藤氏の考えるキリスト像なのではないかと思う。だから、この『沈黙』を読んでいくうちに、直接教つてくれるわけではないが、いつもいっしょに苦しんでくれる神だからこそ、「苦しむ時の神だのみ」でいいのではないかと思えるようになった。

そして、この作品は弱者にスポットをあてて人間の本质にせまつている。私は、この弱者の論理におおいに共感してしまつた。この世の中で本当の強者など、そういうものではない。だれしも心の底

には弱い部分をもち、それを、エゴイズム、プライド、見栄、虚勢などによりその部分を隠している。本当の強者というのは、もって生まれたものだからそのまま強者でいられる。しかし、弱者はどうかろう。強者になりたい！ ならうと努力する。しかし、どうしても強者になりきれない。そういう弱者の悲しみ、苦しみをあからさまに、しかもあたたかさをもって描いた遠藤氏の人間としての大きさを感ずることができた。

今、この卒業論文を書きおえて、どれだけこの『沈黙』を読むことができたかわからないが、少しでも遠藤文学にふれることができたと喜んで思っている。

参考文献

- 遠藤周作著『沈黙』 新潮文庫（昭56）
『遠藤周作の研究』 実業之日本社（昭54）
武田友寿著『遠藤周作の世界』 講談社（昭46）
武田清子著『土着と背教』 新教出版（昭42）
小久保実著『遠藤周作の世界』 和泉書院（昭58）
北森嘉蔵著『日本の心とキリスト教』 読売選書（昭48）

〔評〕

近年の我国の文壇史上、遠藤周作氏の創作『沈黙』の一篇ほど大きな影響を与えたものはないであろう。教会論、キリスト論をはじめ、日本文化の性格と特質、信仰における土着と背教、強者と弱者などの観点から読み、文学的に深く掘下げようと努力した論考である。

自らの問題として死を生きる文学上の命題に行き当った中村さんにとり、今後、さらに旧・新約聖書そのものを読み、聴き、考え、真実な根源の理解へと導かれることが大切になるであろう。それは一面において、日本文化の性格という在来のものを超え、自らの存在を規制しているものが碎かれて行く営みである。そのようにして、逆説的で難解とも言える遠藤文学をより深く知り、また批判する力が与えられるであろう。

（寺田芳徳）